

1. 開会の挨拶

2.

2. 会長選出、挨拶

会員：藤井正俊氏、小川朋子氏、中村俊一氏、上田文章氏、羽田野建夫氏、藤原功氏
会長は藤井氏にお願いする

3. 授業見学

ア) 今年度新規採用の数学科教員の授業

- ・硬さは感じられたが、全体的には落ち着きのある授業が展開されていた。細かいところで改善すべき点はあるが、声もよく通り、説明も落ち着いていた。素質が感じられた。今後が期待される。
- ・「実はこんな方法もあるよ」という α の話があればもっと惹きつけられるのではないか。
- ・一般論として、円や直線をコンパスや定規で描くのは交差点ごとに信号待ちをするようなもので、集中が途切れてしまう。是非フリーハンドで描いて欲しい。

イ) 再任用の理科教員の授業

- ・堂々とした貫禄が感じられた。豊富な知識を背景に授業が展開されておりストーリー性もあり、話に引き込まれた。
- ・生物も科学であることを再認識した。

4. 平成 26 年度史跡探訪について

単位制ならではの集中講義形式の講座。(今年度で 5 回目)

夏期休業中の研修旅行を中心に前後の学習も含めて単位認定をする。

<別紙資料に基づき説明>

- ・今年度は徳島県(眉山・鳴門・大麻比古神社・霊山寺・ドイツ館など)
- ・テーマは「自然と人間」
鳴門や吉野川の自然、俘虜収容所やお寺巡りの人々、さらに人間が自然と向き合うという意味での第十堰問題や藍染めを教材とする。
- ・3年生 11 名、1年生 8 名の参加
- ・研修中は非常に暑かったが、事前学習のかいもあって、非常に充実した 2 日間となった。学習面でも非常に効果的であったので、来年度以降も継続していきたい。

5. 平成 26 年度前期授業アンケートについて

- ・昨年度より年 2 回の実施。本年度は前期・後期ともに個別方式で実施する。
- ・前期は 6 月末から 7 月末にかけて実施。
- ・各担当者が講座ごとにアンケート用紙を配布・回収し、提出する。その後集計を行い、担当者に結果を返却する。
- ・一斉方式のメリットもあるが、やはり個別方式の方が記述欄への書き込みも多く、以後の授業改善に役立てやすい。
- ・記名の有無は？
 - 生徒各自の判断に委ねている
- ・担当者が回収する方式では、あまり思い切ったことが書けないということはないか
 - 結果として、生徒は忌憚のない意見を書いているので問題は感じられない。授業の様子は反映されているようだ。
- ・授業改善だけではなく、評価育成制度にもリンクしているのか
 - そのとおり
- ・この方式の方が、授業改善に役立っていいと思われる。
- ・数字は嘘をつかない。生徒が中心の授業か、教員自身が中心の授業になっているかは如実に現れる。教員には「一生の仕事としてやっていく」という気概が必要。

6. 平成 26 年度主な学校行事について

野外活動（7 月）、鳳高祭（9 月）、ガイダンス関連行事（6 月・10 月）、保護者懇談（6 月・11 月）、センターリハーサル（12 月）、百人一首大会（1 月）、スピーチコンテスト（2 月）、平成 27 年度入試（2 月）、卒業式（3 月）など日程を紹介

7. 意見交換など

- ・単位制に改編して 7 年目を迎えているが、学校に変化はないか。
 - 当初から懸念されていた「やってみなければわからない部分」については年々微調整を加えながら進んでいるが、ありがたいことに大枠では予定していた通りの内容で単位制のシステムが動いている。転勤等に伴って教員の入れ替わりはあるが、新しく来られた方々から否定されるようなことはなく、それぞれ一員として頑張ってもらっている。
- ・立ち上げに関わったメンバーがいなくなると途端にシステムが崩れる例は多くみられるが、継続しているのはすばらしい。
 - 改編に多くの教員を巻き込んでできたのがその要因ではないか。当時の教員の 8 割くらいが何らかの形で改編に関わり、様々なアイデアを出し合った結果が形になっている

- ・今は何かというと「改革」が迫られるが、逆に鳳高校の成功例をスタンダードとして府教委に売り込んでみてはどうか。子供たちの意識の変化、教員の意識の変化に対応している姿を認めさせて欲しい。
→校内研修で若手とベテランの交流も図りながら、教員が一丸となって諸課題に対応できるよう体制を整えている。これからも継続したい

8. 次回の学校協議会について

例年第3回は2月中旬に開催しているが、今年度も一応その形で考える。
詳細は後日連絡。

9. 閉会のあいさつ